○「草木研究会」について（木村陽二郎） Yojiro KIMURA: "Somoku Kenkyu Kai"

筆者が東京帝国大学理学部植物学科を卒業したのは昭和11（1936）年のことであるが，この年の暮近く師の中井猛之進教授は草木研究会をつくられた。その趣旨や内容については，中井先生自ら執筆された「設立趣意書」「規約」「標品鑑定規程」の三葉の縦書きの印刷物をここに再録するので，これを見られたい。これら印刷物は1000枚づつ印刷されて各方面に郵送された。なお，以下の文では原文の旧漢字を新字体に改めてある。

草木研究会設立趣意書

中井猛之進

豊葦原ノ瑞穂ノ国ハ北ハ半寒帯地方ニ始マリ南ハ熱帯地方ニ迄モ長ク延ビタ島帝国デアルガ此列島ハ啻ニ南北ニ延ビテ居ル許リデナク地形ハ複雑極マリナク又高山ガ至ル所ニアリ最南ニアル台湾デスラ高山ノ頂ニハ半寒帯植物ガ生エテ居ル。現世界ニアル植物ハ漸新期頃ヨリ気候ノ変化ニツレテ異常ノ変化ヲ遂ゲ殊ニ所謂氷河時代カラハ陸地ノ陥没隆起ノ甚シイノト共ニ革命的ノ変化ヲナシタ。欧米ノ中部以北ハ氷河襲来ノ厄ニ遇ツタカラ一時草木ガ全ク絶エ氷河ノ退クト共ニ南地カラ新ニ植物ガ侵入シタ為メ植物ノ種類ガ少イガ我邦ハ氷河ノ厄モ少ナク生ヒ茂ル植物ハイヤ栄エニ栄エタ為メ今日ノ開ケタル世ニモ尚ホ且ツ限リナク新植物ガ発見サレル程ニ植物ハ豊富デアル。抑モ郷山ノ観念ハ其土地ニ生フル植物ニ起因スル，世界ガ皆禿ゲタル山ヤ野許リデアルナラバ何処ヘ行クモ同ジ風景デアツテ故郷他郷ノ別ハナイ筈デアル。神州日本ガ実ニ万邦無比ノ勝レタル風景ヲ持ツノモ亦植物ガ無類ニ豊富デアルコトガ一大因ヲナシテ居ル。斯ノ如ク豊ナル草ヤ木ノ中ニハ又美シイモノヤ珍ラシイモノガ多イ。欧米人ノ賞美スルつつじ，つばき，ふぢ，きく，はなしやうぶヤ，英仏白蘭ノ至ル所ニ生墻ニ用キルおほばいぼた，マサチユーセツツ州ノ住宅ト云フ住宅ニ植エテアルのりうつぎ，めぎ，大キイノハひのき，あすなろヲ始メ欧米ノ庭園樹ノ大部分ハ我邦カラ持込ンダモノデアル。斯様ナ数多キ園芸植物ノ原産地デアル程草木ニ恵マレタ国ニ住ム国民ガ植物ヲ愛シ賞美シナイ筈ハナク昔カラ歌ヤ文ヤ詩ヤ俳句ニ幾百ノ草木ガ取リ入レラレタノモ宜ナル哉デアル。従テ野ニ遊ビ山ニ登リテ見馴レヌ草木ヲ見レバ唯「名なし草」トカ「名も知れぬ木」デ過スコトハ人情トシテ忍ビ難イノデアルガ，扨テ此等名ヲ知ラヌ草木ヲ持チ帰ツタラ尋ヌベキ所ガアルカ？ 先ヅ尋ネン所ハ国立ノ科学博物館カ専門ノ大学デアルガ我邦唯一ノ文部省ノ科学博物館ハ理科学，博物学ノ各部門ヲ合セテモ尚ホ年額数万円ノ謂ハヾ蚊ノ涙程ノ金ヨリ政府ハ経常費トシテ支出シテ呉レナイ。博物館ニ勤務スル人々ガ如何程献身的ノ努力ヲシタカラトテ博物館ノ設備スラモ完成ガ出来ナイノニ一般ノ指導機関トナリ得ル道理ガナイ。次ニ大学ハドウカト云フト大学令ノ第一条ニ「大学ハ国家ニ須要ナル学術ノ理論及応用ヲ教授シ竝ニ其蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及国家思想ノ

涵養ニ留意スベキモノトス」トアル通リ大学ノ目的ノ主体ハ学術ヲ教授シ其蘊奥ヲ究ムルニアツテ一般ノ人ヲ教ヘタリ又ハ一般人ノ相談相手ニナルベキ所デハナイ。学問ニハ終極ハナク日進月歩ノ学ヲ修メ之ニ遅レズ又権威者タラン為メ即チ大学ノ教授タル資格ヲ保有セン為メニハ実ニ不断ノ超人的努力ヲ要スルノデアツテ国家ガ大学ノ教授ノ位置ヲ高クシテ居ルノモ此超人的努力ニ報キン為メデアル。其故大学ノ教授ハ真ニ僅カナル余力ヲ用ヰテ一般人ニ其智識ヲ頒ツコトハアルガ学生ニ教授スルコトト自ラ研究スルコトト日進月歩ノ知識ヲ取入レルコトデ時間ハ一杯デアル。斯ク科学博物館モ大学モ相談相手ニナラヌナラバ折角万邦無比ノ豊富ナル植物界ヲ有シナガラ神州ノ民草ハ草木ノ名モ知ラズニ過サナクテハナラヌ。然ラバ大学デ或制度ノ下ニ一般ノ相談所ヲ設ケタラヨイデハナイカトノ意見ガ出ルデアラウガ現時ノ大学ノ性質上其様ナ機関ヲ設ケルコトハ不可能デアル。而シテ若シ大学ノ一教授ガ一般人ニ同情シ其相談相手ニノミナツタラ其コソ其教授ハ其職責ヲ尽シ得ズ教授タル資格ヲ失フノデアル。其ナラモツト若イ助手トカ大学院ノ学生ナドナラバト考ヘルト此等ノ若イ人々ハ教授連ヨリモ其数ハ多ク，忙シイ程度モ少イガ此所ニモ困ルコトガアル。其ハ大凡植物ノ鑑定ヲスルノニハ其ニ対スル報酬ヲ取ル先例ガナイカラ若シ或一人ガ此セチ辛イ世ノ中ニ無報酬ノ仕事ヲスルコトモアルマイト考ヘテ報酬ヲ要求シタナラ其人ハ必ズ一般カラヨクハ言ハレナイニキマツテ居ル。植物学者ガ植物ヲ鑑定シテ報酬ヲ受クルノハ当然デ恰モ医師ガ患者ヲ診察シテ診察料ヲ取リ弁護士ガ書類ヲ鑑定シテ鑑定料ヲトリ刀剣鑑定家ガ刀剣ヲ鑑定シテ報酬ヲ得ルト何等変リハナイ筈デアルガ先例ノナイコトヲ始メルト他カラ攻撃サレル，攻撃ヲ承知デ新機軸ヲ出スコトハ若イ人々ハ一寸手控ヘルノガ当然デアル。此遠慮ハ反テ一般同好者中ニ「一般人ノ為メニ無料鑑定ヲスルノハ学者ノ義務デアル」ナドノ暴言ヲ吐ク因ヲナシテ居ルノデアル，然シ手当ノ少イ大学ノ助手ヤ職ノナイ大学院ノ学生ガ其様ナ事ヲシテ居タラ助手ハ食ハズニ働キ大学院生ハ親ノ脚ヲ噛リ乍ラ他人ノ為メニ尽スト云フコトニナル，其ンナコトヲ学者ノ当然ノ義務ト言フ人々ニハ私ハ狂人ト呼ビカケタイノデアル。草木研究会創設者タル筆者ハ明治四十年ニ帝大ヲ卒業シ助手ヲ拝命シタ時カラ一般ノ同好者ハ植物ノ鑑定ヲ依頼シ始メタガ筆者ガ自身ノ勉強ニモナルト考ヘテ之ニ応ジテ居タ所一両年ナラズシテ標本ハ山積シ質疑応答ヲ完全ニセン為メニハ助手ノ職責スラ尽スコトガ出来ナクナリ学者ノ義務云々ノ暴言ヲ敢テスル輩モ出テ来ルシシタカラ断然玉石混淆シテ一切ノ植物鑑定ヲ謝絶シタ，然ルニ近年筆者ガ竹類ノ研究ヲ開始シタノヲ知ツテ復々鑑定依頼ガ続出シ殊ニ最近デハ一年間ニ百包モ殺到スル様ニナツタカラ是亦謝絶ヲ止ムナクサレル様ノ状態ニナツタ。断ルノハ何時デモ断ラレルガ然シ斯ク迄熱心ナ又知識慾旺盛ナル一般同好者ガ師弟ノ礼ヲ厚フシテ依頼スルノヲ無碍ニ断ルノモ心ナキ業デアル。故ニ一般的ニ問フモノト答ヘルモノトノ間ヲ調停スベキ方法ハナキカト在京ノ有志殊ニ東京帝国大学理学部植物学教室ノ人々ヲ中心ニ相談会ヲ開イタ結果新ニ草木研究会ヲ組織シ法制局参事官法学士佐藤達夫氏ヲ煩ハシテ法理ニ牴触セヌ範囲内

ニ於テ会トシテノ標品鑑定ノ規約ヲ作リ上ゲタノデアル。然シ今出来タ所ノモノハ決シテ創設者側ニモ満足ナモノデハナイガ暫定的ノ試案トシテ天下ニ公表シ其規約ノ範囲内ニ於テ東大関係ノ若イ学士連ガ一般同好者ノ為ニ一肌脱ウト乗リ出シタノデアル，春秋ニ富メル此同情者連ニ依ツテ一般同好者ニ或程度ノ満足ヲ与ヘ得レバ本会創立者ノ望外ノ幸デアル。

昭和十一年十月一日

草木研究会規約

一、本会ハ草木研究会ト称シ事務所ヲ東京帝国大学理学部植物分類学教室ニ置ク

二、本会ハ一般社会ノ植物ニ関スル知識ノ涵養及普及ヲ図リ併セテ東京帝国大学理学部植物学教室所蔵標品ノ充実ヲ図ルヲ以テ目的トス

三、本会ハ其目的ヲ達成スル為メ標品鑑定ノ依頼ニ応ジ又随時採集会，研究会等ヲ開催ス，又地方在住会員ノ依頼ニ応ジ指導講師ヲ派遣スルコトアルベシ

四、本会ノ趣旨ニ賛成スルモノハ何人ト雖モ会員タルコトヲ得
会員ハ会費年弐円ヲ前納スルモノトス

五、会員ハ本会ノ催ス採集会又ハ研究会ニ出席シ無料指導ヲ受クル特権ヲ有ス。又別ニ定ムル規定ニ従ヒ標品ノ鑑定ヲ受クルヲ得

六、本会ニ左ノ役員ヲ置ク
会長，顧問，幹事，鑑定員
顧問ハ会長之ヲ推薦ス
幹事及鑑定員ハ植物分類学教室又ハ理学部附属植物園所属員又ハ関係者中ヨリ会長之ヲ指名ス

七、会員ニシテ本会規約ノ改正又ハ新条項ノ追加ヲ要求スル場合ハ予メ幹事ヲ経テ会長ニ申出ヅルヲ得

八、会員ニシテ本会ノ目的ニ反シ又ハ会員ノ義務ヲ履行セザルモノハ之ヲ除名スルコトアルベシ

本会ノ役員ハ左ノ如シ

会長	東京帝国大学教授同植物園長	理学博士	中井猛之進
顧問	東京帝国大学講師	理学博士	牧野富太郎
同	東京帝国大学助教授	理学博士	小倉謙
同	法制局参事官	法学士	佐藤達夫
幹事	東京帝国大学助教授	理学博士	本田正次
同	東京帝国大学助手	理学士	前川文夫
同	文部省科学博物館蒐集委員		久内清孝
鑑定員	東京帝国大学理学部植物園園芸主任		松崎直枝

東京文理科大学助手	理学士	小林義雄
東京農業大学講師	理学士 男爵	佐竹義輔
東京帝国大学理学部副手	理学士	原 寛
満洲国大陸科学院研究士	理学士	北川政夫
	理学士	伊藤 洋
	理学士	佐藤正己
	理学士	津山 尚
	理学士	木村陽二郎
		石川茂雄
		籾山泰一

草木研究会標品鑑定規程

草木研究会ハ左記条項ニ拠リ会員ノ需ニ応ジ標品ノ鑑定ヲ行フ

(一) 鑑定スベキ標品ハ主トシテ東亜所産殊ニ内国所産植物ノ標品（生植物，乾腊標本，液浸標本，材幹・化石）トス

(二) 標品ハ最モ完全ナルモノヲ選ビ一点毎ニ番号，採集年月日，採収地名，採集者氏名其他ノ参考事項ヲ記載シタル紙片ヲ附スベシ

(三) 標品ノ番号ハ第一回送附ノ分ヨリ通シ番号ヲ用フベシ。採集地及ビ人名ハ漢字ニテ記シ之ニ振仮名ヲ附スベシ

(四) 標品ノ鑑定依頼ハ一回三十点一ヶ年二百点以内ニ限ル

(五) 標品ハ完全ニ包装シ東京市本郷区東京帝国大学理学部植物学教室内草木研究会宛ニ送附スベシ

(六) 鑑定依頼ト同時ニ返信料及左記ノ鑑定料ヲ納ムベシ

（料金ハ現金又ハ郵便為替ニ限ル。現金払込ハ振替貯金口座東京壱弐七参壱〇番ヲ利用サレタシ）

(一)	顕花植物及羊歯類	一点ニ附	各十銭
(二)	下等隠花植物（蘚苔類，菌類，藻類，地衣類等）	一点ニ附	各二十銭
(三)	外国産高等植物及ビ園芸植物ノ品種	一点ニ附	各二十銭
(四)	化石植物	一点ニ附	各一円
(五)	材幹	一点ニ附	各五十銭

(七) 鑑定ニ際シ薬品，機械類ヲ要スルモノヽ中特ニ多額ノ経費ヲ要スルモノハ其実費ヲ追徴スルコトアルベシ

(八) 標品ハ之ヲ返附セズ，本会ヨリ学術研究ノ参考資料トシテ東京帝国大学理学部植物学教室ニ寄贈ス

(九) 鑑定ハ本会ノ役員タル植物分類学及形態学専攻ノ東京帝国大学教授，同助教授又

ハ植物学教室竝ニ理学部附属植物園ノ所属員又ハ関係者之ニ当リ教室又ハ植物園所蔵ノ標品ト比較同定シ又ハ特ニ研究ノ上回答ス

この印刷物の配布を受けて真先に会員となられたのは三重県上野町の黒川喬雄氏で，その年の12月のことであった。続いて翌年の昭和12年には高知県立農業学校の森岡龍氏，千葉県長狭中学校の浅野貞夫氏，東京小石川の檜山庫三氏，長崎市の千葉常三郎氏，三重県上野町の筒井養之助氏，鹿児島伊佐農林学校の村松七郎氏，三重県上野町の県立阿山高等女学校の入交（イリマジリ）建久氏，朝鮮の江原江陵公立農業学校の玄基岳氏，県立福井中学校の堀芳孝氏，岐阜市の岐阜薬学専門学校植物山岳部有志，京城薬学専門学校生薬学教室有志，愛媛県新居浜高等女学校の山本四郎氏，三宅島神着村の林憲氏であった。

次の昭和13年には門司市の吉岡重夫氏，徳島県川島町の阿部近一氏，長崎県立女子師範の外山三郎氏，新潟県相川中学校の池上義信氏，また昭和14年には前橋市の武藤郁氏，佐賀県塩田町の馬場胤義氏，そして昭和15年に小石川区大塚仲町に住んでおられた沼田真氏であった。この昭和15年の２月には幹事として事務一切を引き受けておられた前川文夫氏が後事を筆者に頼んだまま出征された。本会についてはくわしい事情を前川博士に伺っておけばよかったが，その機会もないままに博士は昨年１月13日に亡くなられた。それで不充分ながら草木研究会の記事を書いて思い出としたいと思って筆をとった次第である。当時会員となられた方たちには立派な地方植物誌を完成された方も多い。教室所蔵の腊葉はこの会により多少充実したと思われる。送られてきた標本は草木研究会の判（図1，下）をおして植物学教室の腊葉室に永久保存されている。送られてきた標本全部を勘定する暇はないが，各役員（敬称略）の鑑定数を昭和12, 13, 14, 15年度まで以下に示す。また，４年間の総数を（　）に入れた数字で示す。15年度というのは昭和16年３月末までの数である。

中井：12, 37, 15, 10, (74)．本田：５，13，０，０，(18)．前川：26, 130, 93, 15 (264)．久内：１，８，０，０，(９)．佐竹：25, 17, ９，１(62)．原：34, ８，０，０，(42)．北川：１，０，０，０，(１)．伊藤：24, 14, 20, ０，(58)．津山：14, 108, 74, 10, (206)．木村：20, 35, 15, 12, (82)．この他は北村四郎氏に13年に４点，木村有香氏に14年に３点，森岡（加崎）英男氏に15年に5点をわずらわした。以上に鑑定不能のもの３点を加え計15点で，これを加えると合計831点となる。

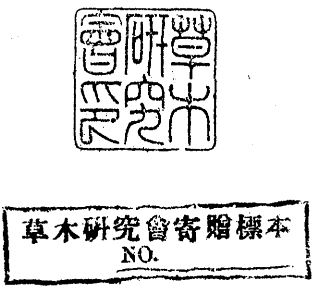


図1．草木研究会の印と，標本ラベルにおした印．

昭和14年に第二次世界大戦が始まり，次第に世の中がさわがしく，昭和16年12月８日には太平洋戦争に突入，昭和17年

には中井先生は還暦を迎えられ大学を退官，12月17日には陸軍司政長官に任ぜられ，翌18年にボゴール植物園長として渡航された。昭和18年の植物学教室では昭和14年以来助手となった筆者は教室事務を北根益治氏と，標本室管理を古沢潔夫氏と，集会，冠婚葬祭，学生の世話役を小倉安之氏と分担した。教室の他のことは宝月欣二，原田市太郎，小倉安之諸氏とが分担した。昭和19年暮近く日本本土爆撃が始まり，植物学教室所蔵の腊葉や貴重図書を原寛博士の世話で長野県の軽井沢の公会堂に疎開した。草木研究会は自然消滅し，余った金は腊葉室へのナフタリン入れ，植物乾燥器の移転費，連絡の葉書代などにあてられた。

草木研究会創立の当時の筆者の偽らざる感想は，この事業は中井先生が弟子たちのことを思って始められたのであるが，諸先輩のように日本フロラ全体を学んでおり，又は学ぼうとされる方には好いが，自分のようにオトギリソウ科のモノグラフにとりついたばかりの者にとってはありがた迷惑だというのであった。なにしろ送られてくる標本はベテランがもてあますような難物が多いのである。筆者はこれらについて僅かに本誌第16巻（1940）1号，2号に「草木だより」(1)-(5) を誌したにすぎない。しかしながらこの研究会の会員を知ることで，研究会とは別にオトギリソウ研究の資料の援助などをうけたことは大きな幸であった。

（東京都杉並区[redacted]Suginamiku, Tokyo)

○高等植物分布資料 (113)　Materials for the distribution of vascular plants of Japan (113)

○レンプクソウ　*Adoxa moschatellina* L. 1984年4月，熊本県阿蘇郡の佐藤武之氏から，見慣れない植物が開花しているがレンプクソウではないかと同定を依頼された。同年5月，同氏の案内で現地（阿蘇郡高森町河地，標高約 760 m）に赴き，レンプクソウが二次林の林縁部から放棄された畑地跡にかけての比較的湿った場所に大きな群落をなして生育していることを確認した。同所からは，九州では珍しいアズマイチゲも見出されている。北半球の温帯に広く分布するレンプクソウは，日本においては千島・樺太から岡山県までに分布することが知られており (Hara, Ginkgoana **5**: 303, 1983)，岡山県以西からは初の報告である。標本 (T. Kato & T. & M. Sato, no. 4001, May 9, 1984) は，東京大学理学部附属植物園 (TI)，京都大学理学部植物学教室 (KYO)，中国科学院植物研究所 (PE) および Royal Botanic Gardens, Kew (K) の各標本庫に収蔵される予定である。　（東京大学 理学部附属植物園　加藤辰己 Tatsumi Kato)